



お江戸舟遊び瓦版 1137号

水彩都市江東 こころ美しい日本の再生 安全・安心まちづくり
お江戸観光エコシティ・お江戸舟遊びの会 江東区千田13-10

鶴見太郎「ユダヤ人の歴史」中公新書 25.1.25

まえがき——ある巡り合わせ

- ユダヤ教では、金曜日の日没から土曜日の日没までが安息日（シャバット）で、労働が禁止された日である。安息日は電気のスイッチも操作することは禁止で、異教徒を労働させることも許されていない。
- 正統派ユダヤ人は、流行の最先端ニューヨークにあって、ユダヤ人街を複数形成し、居住国と折り合いをつけながら、自らの原則は貫く。金融業で成功し、富豪として西洋社会に存在感を持つ。
- ユダヤ人のイメージは、がめつい人びと、かわいそうな人びとだ。



第1章 古代——王国とディアスポラ

- ユダヤ教、キリスト教、イスラーム教に共通する信仰は排他的一神教と呼ばれ、世界を唯一司るところの同じ神を信仰する。異なるのは、神の道に到達するための考え方や実践である。ユダヤ教の場合、大きな国家や帝国に支配される中で、そこにおける神々と差異化し、自らのアイデンティティを保つ必要があったことで、次第に排他的一神教の傾向を強めていった。
- ユダヤ教は、前6世紀末に都市国家を樹立した。ローマは、前3世紀半にイタリア半島の霸者となり、東アジアの先端まで勢力を拡大し、前63年エルサレムに侵攻し、ユダヤの神殿を陥落し、ユダヤ人の居住地は縮小され、残った一つがイエスの活動したガリラヤ地方だった。パレスチナでは、70年に神殿がローマによって崩壊され、集団自決し、戦争は終結した。これ以降1948年にイスラエルが建国されるまでユダヤ人は独自の国を持たないまま世界各地で暮らすことになった。
- 2~3世紀にかけて、キリスト教は「新約聖書」を編纂し、一方で「旧約聖書」も聖典として残った。ユダヤ教とキリスト教は、大元は共有しながらかなり異なっている。ユダヤ教は律法中心主義で、日常生活での実践を重視するが、キリスト教は内面を重視し、神への信仰を重要とする。

第2章 古代末期・中世——異教国家のなかの「法治民族」

- 拠点としての王国を失ったユダヤ人だが、中世は混迷の時代ではなかった。7~13世紀まで世界のユダヤ人の9割がイスラーム諸国に暮らすことになった。パレスチナ時代、神殿とそれを司るものを中心にユダヤ社会は成り立っていた。
- キリスト教の司祭や牧師に相当するラビはユダヤ共同体で中心的役割を果たし、円滑に商取引をすることができるラビこそが、大商人として活躍するようになる。ラビも、はじめは小さな教会での活動から始まってキリスト教のように、律法の学究に勤しみ、日常生活につながる運動を増やす中で拡大していった。313年キリスト教がローマで公認され、392年には国教となると、ガリラヤ地方に辛うじて生き残るユダヤ人の状況は悪化した。
- 圧倒的多数が農民だった時代にユダヤ人の職業が金融や商業に偏っていったのか諸説ある。ユダヤ教とイスラームは犬猿の仲であると錯覚されているが、キリスト教とユダヤ教の類似性よりも、イスラームとユダヤ教の類似性がはるかに高い。いずれの宗教も実践の指針としての法学を最も重視するからだ。心の中で神を信じると言つても外からは判断つかない。偶像崇拜の禁止を両宗教とも厳密に守っている。
- 10世紀以降、イスラーム勢力が分裂し、バビロニア圏は弱体化し、13世紀にモンゴル系諸勢力が



ペルシャ、メソポタミア、アンカラまで押し寄せ、イル・ハン国を樹立した。こうした中でユダヤ人は激減し、1500年には世界のユダヤ人は100万を切り、イベリア半島が中心となった。

- スペインのユダヤ社会は、イスラーム教とキリスト教を橋渡しし、ユダヤ人を金づるとして利用するキリスト教権力者とそれを腐敗と捉える庶民の間に反ユダヤ感情を蓄積していった。
- 西欧では都市化により統治構造が変化し、経済が発展し、キリスト教も商業に参入し、競合関係が生まれた。英仏では中央集権的国家が確立し、国王の意向が国家全体に反映されやすくなり、イギリスでは1290年ユダヤ人追放令、15世紀にはユダヤ人はほとんど姿を消した。ドイツではユダヤ人が追放されなかつたが、スペインではキリスト教に改宗した。

第3章 近世——スファラディとアシュケナジム

- 16~19世紀、大航海時代、ヨーロッパ諸勢力が進出し、内部では宗教改革等による度重なる戦争の後の主権国家体制が形成された。イスラーム圏とキリスト教圏で挟まれたスペインのユダヤ人は、商業面でも学問面でもユダヤ社会を率いる存在だった。
- 15世紀後半オスマン帝国が拡大の一途にあり、イベリア半島を追われたユダヤ人は帝国の経済を強化する絶好の人材だった。オスマン帝国では都市部の様々な職種につき地域経済の中心に。
- 16世紀、ポーランドは穀物大生産地として栄え、大国の地位を固めていった。ユダヤ人はポーランドの16世紀を大黄金期と呼び、18世紀後半には世界のユダヤ人口の1/3に及んだ。だが、17世紀半ばからユダヤ人を取り巻く状況は西欧の寒冷化で経済が停滞し、不安定化した。

第4章 近代——改革・革命・暴力

- ドイツ哲学者バウアーは「ユダヤ人は棄教してのみ解放される」と説き、マルクスは「ユダヤ教と同義である資本主義を変革しない限りユダヤ人を含む人類の解放はない」と批判した。
- フランスでは1848年二月革命時に、アルザスで大きな反ユダヤ暴動が発生した。ユダヤ人が農村にも多く暮らしていたドイツでは、1910年にはユダヤ人口の半数が都市に暮らすようになった。当のユダヤ人は、中身を変えようと、ハスカラー（ユダヤ啓蒙主義）を始め、ドイツ化した。
- 18歳からウイーンに住み始めたヒットラーは、1910年頃ユダヤ人の貧困地域に住んでいた。普仏戦争に勝利したドイツ帝国は、反ユダヤ主義を扇動するようになっていた。1900年、世界のユダヤ人口の約半数の520万人がロシア帝国に暮らしていた。二番はオーストリア・ハンガリー帝国の207万入、ついで当時移民により急速に増加していたアメリカ100万入、ドイツ52万人。
- ロシア皇帝はユダヤ人を疎ましく思いながらドイツでユダヤ人が啓蒙化した事例を参考し、ユダヤ人再教育を進めた。オスマン帝国とのクリミア戦争でロシアは英仏の参戦で敗北し、帝国の大改革を進め、ユダヤ人が首都やモスクワに居住し、「ロシア・ユダヤ人」という意識を持った。
- 1917年、ロシア革命で内戦が勃発し、ユダヤ人にとっておぞましいものだった。内戦が特に複雑化したのがウクライナのポログラム（ユダヤ人への集団的迫害行為（殺戮・略奪・破壊・差別））だった。桁違いの規模に拡大し、5~20万入のユダヤ人が死亡した。ロシア・ユダヤ・ウクライナの三者関係の中で、ユダヤ人への攻撃者が想起していたのは「民族対立」でもあった。1941年ドイツのソ連侵攻で多くのユダヤ人が殺害された。ホロコーストにおけるユダヤ人の死者数は600万入、半数がガス室だった。国別では、収容所はポーランドが最も多く、独ソ戦の主戦場となったポーランドで600万入のポーランド人が死亡した。
- 第一次大戦敗北後多額の賠償金を要求され、経済的にも苦しむ中で、ユダヤ人はドイツから八つ当たりされた。1939年ドイツはポーランドに侵攻し、第二次世界大戦がはじまった。

所感：2000年もの間、アラブとユダヤ人の間で対立が続く中、その争いの歴史を紐解いた貴重な著書で、さわりしか紹介できていない。是非手に取って、読んで頂ければと思う。個人的には、差別を排除し、人権を尊ぶ社会連帯経済のGSEFの展開を期待したい。（文責 中瀬）

参考：[GSEF ボルドー大会とバルセロナ協同組合見学 新しい協同組合の要諦とは 平山昇（プレカリアートユニオン組合員） - プレカリアート](#)



ホロコーストの犠牲者の国別・地域別人口